

平城宮東院地区の調査 (平城第593次)

平城宮は約1km四方の東側に東西約250m、南北約750mの張出部があり、その南半約350mの範囲を東院地区とよんでいます。東院地区では、『続日本紀』等の文献から、皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られています。

2006年度から、東院地区西辺部の重点的な発掘調査を継続しており、今回の調査では、西辺部から中樞部にかけての遺構の様相を引き続きあきらかにすることを目的として、第584次調査区の北に調査区を設定しました。調査面積は969㎡で、2017年10月2日に調査を開始し、2018年1月31日に終了しました。

今回の調査では大きく2つの成果が目につきます。まず、奈良時代前半の大型掘立柱建物を検出しました。この建物は東西9間以上の東西棟建物で、床張りの構造であったとみられます。柱筋の検討からは、昨年の南隣の調査区(第584次調査)で検出した南北10間×東西2間の南北棟建物と一連の空間を構成していたとみられます。建物は調査区外東方へ続いており、今後の調査によって全貌があきらかになることでしょう。

2つ目は、奈良時代後半の大規模な井戸とこれから派生する溝と建物を検出しました。井戸は周囲に石組溝が付属する大規模なもので、東西約9.5m×南北約9.0mの範囲を方形に深さ約0.3m掘り込み、その中心に東西約4.0m×南北約4.0mの平面方形の井戸枠の掘方を設けています。これは平城宮内では内裏地区でみつまっている井戸に匹敵する宮内最大級の規模です。

また、井戸からは東西方向の溝が派生しており、



調査区全景(北西から)

この東西溝がさらに2本の溝に分岐し調査区外西方へと続いています。この2本の溝は建物内に引き込まれていることから、井戸からの水を建物内で利用していた様子がうかがえます。

これらの溝は廃絶時に多くの土器とともに埋め戻されており、その内容をみると食器類に加えて須恵器の甕や盤、土師器の甕やカマド等の貯蔵具・調理具が目立つ点が注目されます。

これらの遺構の状況と出土遺物の内容からみて、今回検出した井戸や溝は、奈良時代後半の東院中樞部の食膳の準備に関連する遺構とみられます。奈良時代後半の東院地区では天皇と五位以上の貴族らが宴を催したことが知られており、これらの宴における食事を支えた空間の一端があきらかになったと考えます。これらの成果は、東院地区全体の空間利用の実態を解明する上で重要な手がかりです。

なお、12月23日には現地説明会を開催しました。冷たい風が吹く中、823名の方々にお越しいただき、平城宮跡の発掘調査成果に対する関心の大きさを実感しました。また、私たちも今回の調査成果の説明に加えて、土や出土遺物を慎重に観察しながら掘り進める発掘調査の楽しさ・面白さを感じていただくために、説明会中に実際に井戸を掘り下げる作業をおこなう「ライブ発掘」という企画を試みました。これからも私たちが日々取り組んでいる発掘調査や研究の成果をわかりやすく紹介して、より一層平城宮跡の重要性をご理解いただける努力を続けたいと思います。

東院地区の調査はこれからも続きますので、今後の調査の進展にどうぞご期待ください。

(都城発掘調査部 小田 裕樹)



現地説明会の様子(南東から)